

## 中村瑞隆博士の思い出

三 友 健 容

中村瑞隆博士から大学に残って学問をしてみないかと言われたのは、大学二年のときであった。もとより教員志望であったが、研究者の生活がどのようなものか分からぬまま、ご返事をしたときのことを思い出す。三年生になり、当時は仏教学部生でも英語の教員となることが可能であったので、多くの科目を受講し出したところ、中村博士から「君は大学で研究者とならずに、高校の教員をするつもりかね」と難詰され、学問研究の道と教育者の道の相違を教えられた。そのとき、先生からは「新聞は読むな、テレビは見るな、そんな時間があつたら専門書を読め」と約束させられた。今の時代ではとても通用しないことであるが、まさに「師厳道尊」そのもので、当時は学生紛争が勃発し始め、大学院に入るや副手として研究補助の傍ら、警備に立ったり、佐々木孝憲先生が担当されていた大蔵経索引にかり出されたりした。それが終わると、夜は中村博士の自宅で『宝性論』の索引作りや『成唯識論演秘』の国訳のお手伝いをしたことが、昨日のように鮮明に思い出す。博士のお手伝いの合間に、当時博士がなされていたネパールの仏教遺跡カピラヴァストウ発掘のお話しやらを、情熱をもって語られ、まだ見たことのないインド、ネパールに夢を馳せた。

小生が図らずも学部長になったとき、博士から時間と身体を大切にせよ、そこそこで辞めよと言われたが、諸般の

中村瑞隆先生追悼文

事情でとうとう恩師の言うことが聞けなかったのは、返す返すも残念である。ようやく学部長を交代してもらい、大谷大学に遊学させてもらったところ、五十年も昔に同じく中村瑞隆博士も大谷大学に來られていたとお聞きし、しかもとても仲の良かった佐々木現順教授の愛弟子の吉元信行教授が小生と親友の間柄であって、小生のサバティカルのために京都遊学の便宜を計ってもらったことなどを考え合わせると仏縁の深さを実感している。

中村博士が亡くなられたらしいという第一報が入ったのは恩師田賀龍彦教授から京都遊学中の宿舎であった。その悲報を直ちに吉元先生に連絡したが、病床にある佐々木現順教授にはとてもお伝え出来ないけれど、必ずお浄土で相見えることだろうからと今もって言えずにいる。

博士のお戒名はまさに先生らしい信念が溢れている。さすがは先生だなと心からお祈り申し上げた。「学恩に報いるに学問をもってせよ」「功を焦るな、専門を貫け」とは恩師のお言葉であるが、中村博士のように「師厳道尊」でありたいと願っても時代が変わってしまったことを身をもって知らされている。

中村瑞隆博士の増円妙道をこころよりお祈り申し上げます。

合 掌

(立正大学仏教学部教授)